君と共に……

朧蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と共に……

【Ｎコード】
Ｎ７８３５Ｃ

【作者名】
朧蒼月

【あらすじ】
響き渡る小鳥のさえずり。眩しい春の日差し。新学期としては最高の清々しい朝。でもなんでだろう？人の気配を感じるのは。そして、俺は直ぐに気がついた。『その気配を発している張本人が、俺の隣ですやすや眠っている』事に。恋愛６０％冒険４０％。はちゃめちゃな天使と一人暮らしの少年が織り成す、サクセスストーリー。

1話∞†∞　天使降臨！？

響き渡る小鳥のさえずり。
眩しい春の日差し。
新学期としては最高の清々しい朝。

でもなんでだろう？　人の気配を感じるのは。
そして、俺は直ぐに気がついた。

『その気配を発している張本人が、俺の隣ですやすや眠っている』
事に。

どうしよう？　家宅侵入罪で現行犯逮捕だろうか？
部屋が荒らされている様子はないが。
第一、荒らした部屋で寝る泥棒なんて聞いたこと無いぞ？

「――んん……あ、おはよ～」

変人決定のコイツはのんびり挨拶だ。
それが、あまりに普通だったから

「あ、おはよう」

って普通に返しちゃったじゃん。

トロ～ンとした目で俺を見つめてくるソイツ。
目は栗色で、クリッとしていて（悪寒）
小さい鼻に、かわいい口。

小顔でとてもカワイイ。
髪の毛も軽くウェーブした淡い栗色の髪で、肩まで伸ばしている。

俺、こんな子家に連れ込んだっけ？
まったく記憶に無し。
酔った勢いとか？
いや待て、俺は本日からようやく中3なんだぞ？

「……あ～！」

いきなり叫ぶな、小顔美人変人。

「あたし、天使です。」

やっぱもったいないけど、警察にぶち込もう。
真っ白な羽付けてるからって、そりゃ無理が……。

「はねぇ！！」

「……へ？」

「はねぇ！！」
あ、そうか。これは最近流行のコスプレなんだ。
俺、そんなプレイ好みだったっけ？
……いや、俺はコイツを知らない！　知っていたくない！

「あ、羽か♪」

「飛べるの？」
飛べるわけ無い。

そうこれはコスプレなんだから。
そう、こんな風にフワフワ飛ぶ訳が……。
「断熱性抜群♪　空も飛べるよ☆」
寝よう。
昔から悪いことが起きた時には寝るべし！
と言われて来たはずだ。
「改めまして、天使ですぅ～」
「黒霧（くろきり）　颯（はやて）です。」
な～んで俺は自己紹介なんてしちゃってるんだろう。
「朝ごはん食べるかい？」
な～んで俺は朝飯に変人さんを誘ってるんだろう。
そうか、俺も純粋な男なんだ。
俺の中の男が警察にぶち込むのを躊躇（ためら）うんだ。
「食べますぅ～」
な～んでこの奇人はすんなりＯＫなのだろう……。
とりあえずキッチンへ向かう。
諸事情により、昔から一人暮らししている俺は、料理は得意だ。
時間は無いが、味噌汁ぐらいは作れるだろう。
ぱぱっと食卓に並べる。
「どう？　美味しい？」

人間の環境適応能力って恐ろしいよな。
「食べられないことは無いわね。」
違う声～♪
これはさすがに、人並みはずれた俺の環境適応能力でも適応は難しい。
このまま倒れることが出来たら、どんなに楽だろう……。

「あ、私は天使よ。」
凛とした声。
意志の強さすら感じさせるその声は、超美少女から放たれていた。
天使その1とは対照的に、全体的にすらっとしているが、
瞳の大きい所は似ている。
瞳の色は真っ黒で、吸い込まれそうなほどだ。
髪も真っ黒でストレート。肩よりやや長い。
そしてやっぱり、真っ白な羽が生えている。

モデルのスカウトがこの二人を放っておく事は無いんだろうな。と思う。

俺ってもうこの環境に慣れてるよね？笑

2話∞†∞　颯の最期！？

「さて、と……。」

学校行かなきゃなぁ～。
今何時だろう？

「7時39分になったばかりよ」

「お、サンキュー。天使B」

……。

日課だし、風呂入らなきゃな。

「俺、これから何するつもりだったっけ？」

「風呂が日課だって言ったばかりじゃない。」

……。

「俺は、ただの一言も！　風呂が日課だなんて口に出してないぞ！」

「あら、しくじったわね。」

まさかの天然だったのか！
こんな有能そうにしてるくせに『天然』なのか！

「そうね、人は私の事を『天然』と呼ぶわ。」

認めた〜！？

「もしもし。」

「はい、桜坂中学です。」

「3年の黒霧と言います。」

「なんでしょうか？」

「今日はどうも調子が悪いので、休みます。」

「はい、分かりました。お大事に。」

「颯君どうんしたんですかぁ〜？」

「調子悪いんだよ。」

お前等のせいで。

「お前等とは失礼ね。名前だってちゃんとあるわ。」

「じゃぁ、教えろ。」

どうせ……。

「天使よ。」

「天使ですぅ。」

うん。やっぱり。

「個人名は無いのかっつってんだろ！」

「ないわ。」

「ないですぅ。」

「わたし達に名前付けてください。ですぅ～」

……。

天使1を指差す。

「お前は『語尾弐（ごびに）　小文字子（こもじこ）』」

天使Bは……。

「お前は『天然（てんねん）　呆気子（ぼけこ）』」

「死にたい？」

「死んでください。ですぅ」

2匹から、殺気が溢れている。

コイツ等『天使』だよな？

『死神』じゃないはずだよな？

「いい加減にしろおおお！」

――1時間後、俺の目の前にはぐったりと、天使が横たわっていた。

ＦＩＮ

じゃなくて！
いや、正確にはあってるんだけど！

「疲れた」

からって終わらせちゃだめでしょ！　作者さん！

「終わらせたいのに、話が伸びていくんだもん。勝手に。」

黙って書けコラァ！

「『ピー』して『バキューン』して『ババババーン』で殺すぞ？
それから……（強制終了）
この世界は俺が作ってるんだから、お前を殺すなど容易い事だ。
フハハハ！」

はい、すみません。
頑張って書いてってください。
「バタンッ！」

作者の手によって、めでたく、颯も天使と横たわることになった。

2話∞†∞　颯の最期！？（後書き）

はい、本当に長くなりそうになったので、こんな形で強制終了です。笑”

すみません！

3話∞†∞　天使の名前　ｗｉｔｈ魔の３話

「名前、付けて欲しいのか？」

「はい。ですぅ～」

じゃぁ、今日中に考えといてやるか。

「やったぁ～！」

つか、人の心勝手に読むなぁ！　　作者「今更かい。」

「まだ私達は力が弱いし、意識を集中させないと読むことは出来ないわ。

それでも、深層意識まで読むことは出来ないんだし。大丈夫よ。」

大丈夫じゃねぇよ！

俺プライバシー無いのかよ！

「そうね。」

鬱病の辛さが分かった気がした。

「ちょっと黙っててくれないか？　名前考えてやるから。」

「絶対いやですぅ～」

こうなったら最終兵器を使うしかないよな？

作者さんＯＫ？

作者「早いけど、ＯＫ。」

「将（しょう）、生姜（しょう）と醤油（しょう）持ってきて。『しょうがないな～』」

将が誰なのかはさて置き、天使１は寒さで凍えていた。

天使Ｂはというと……。

「フフッ。なかなか面白いわね。」

なんで～？！

「まぁ、静かにしといてあげるわ。その代わり、ちゃんと名前付けなさいよ？」

――日が暮れかかっている。

人の名前を考えるのはこんなにも大変なことだったのか。

「名前できたぞ～」

「やった！ですぅ」

「え～、それでは。天使２人の襲名式を執り行ないます。」

「芸人みたいね」

３／４あってるよ。

「え～っと、まず栗色！　お前は『神園（かみぞの）　朝日（あさひ）』」

「それから、黒！　お前は『神園（かみぞの）　雫（しずく）』」

「……。」

「……。」

「文句あるか？」

「面白くないですぅ～。『魔の３話』ですぅ～」

「面白いところが全く無かったわね。」

お前笑ってたろ！

つまらんダジャレで！

「文句あるなら、朝日はやっぱり『語尾ｎ』…」

「ごめんなさいぃ～」

3話∞†∞　天使の名前　ｗｉｔｈ魔の3話（後書き）

作者の諸事情により、短いですが終了です。（おい）
朝日と雫をどうぞ宜しくお願いします。

4話∞†∞　服、欲しい？の巻

「…は…く……さい」

白菜？

「い…か……は…く……さい」

烏賊と白菜…。

何を喋ってるんだ、雫は……。

今日の朝飯か？

……飯作るの俺だったわ。

「いいかげん、早く起きなさい！」

「はいぃ！」

今日の朝飯じゃなかったみたいだな

「ご飯早く作って欲しいですぅ～」

「はい、はい。分かりましたよ。」

※注）俺はシェフや、執事や、家政婦ではない。

天使が俺の家に来てから、早5日。

結局俺は1週間も学校をサボっていた。

天使と過ごす、初めての休日がやってきた。

「ごっはん～ごっはん～ですぅ」

黙れ。
うるさい。

「今日はステーキがいいわね」

朝飯だろうが、ボケ。

「ったく……」

天使の癖に肉食おうとしてんじゃねぇよ。
既に、俺の中で『天使＝神聖』という方程式は崩れていた。

肉食うし、直ぐに殺すって言うし……。
昔はちょっとした料理でよかったのに、今は丹精込めて作らないとうるさいし……。
ゴミ捨てに着いてこようとするし。
あの服装で。
そうこの服装で。

「…服、ほしい？」

「……ほしいです！　めっちゃほしいですぅ！」

米粒撒き散らしながら叫ぶな。

「私に貢ぎたいというなら別に構わないわ」

貢ぐ気は無し。
よって服は無し。

「私にこんな薄汚いローブをいつまでも着せておく気?！」

逆ギレすんな。

まぁ服買わないと、俺はどこにもいけない。
理由＝こいつらどこにでも着いてくるから。
だってこいつら、真っ白なローブ着てるし。
完全に変質者なのである。
幸い、羽は一般人には見えないのだが、

「疲れた」

なんて理由で飛ぼうとするのだ、こいつら。

「俺が買ってきてやるから、留守番してろ」

「……。」
「分かったわ」

なぜ黙る、朝日。
まぁいいとりあえずいこう。
貯金はたっぷりあるし、問題は無い。

――１０分後…

なんでついてきてんだよお前等ぁ～！！

「他の人には見えないようにしてるから、大丈夫。」
いや、そういう問題じゃなくて……。
てか、そんな能力あるんなら早く使えよ！
「な　ん　で、留守番しなかった？」
「私達の世界に『留守番』なんて言葉存在しないわ」
ならなんで変事した～！
……ボケてるからだよな。
「まぁいい。ついたぞ。」
雑誌に良く載る、有名なファッションショップ。
しっかり看板に『レディース』と書いてあるのに、
まさか俺が入ることになろうとは……。
「いらっしゃいませ～！」
元気な声が響く。
もう、俺の頭で二人の格好は決定してある。
こういうのが好きで、また得意なんだ、俺は。
あ、妄想のほうじゃなくて、ファッション関係のほうね？
雫はブーツカットジーンズに、ミニスカートタイプの黒いワンピース。
朝日は、デニムの短パンにカットソー着てバックにでっかいリボン付いた白い上着。

もちろん買うときには
「プレゼント用に包装してください。」
と頼み込んだ。
そのまんま買うのは恥ずかしすぎる。

そして帰り際に、雫にハイヒール、朝日にブーツを買ってやった。

ちょっと帰るのが楽しみだったりする。
財布は見事に空になったが、満足だ。

「早く帰るぞ～」

「は～ぃ」

5話∞†∞　欲望と理性の間（前書き）

この第5話では、未成年にふさわしくない表現が含まれております。
ある程度、伏せておりますが15歳未満の方は読まないで下さい。
この章を飛ばしていただいても、内容に影響はありません。

5話∞†∞　欲望と理性の間

ようやく家に到着。
それまでの道のりで行く人々が俺を妖しげに見つめていたのは、俺がにやけてたからだろう。

「おら、後ろ向いててやるから早く着替えろ。」

「着替えたですぅ」
「…出来たわ」

「……。」
急に吐き気がしてきた。

「どうしたんですかぁ？」

二人の格好はあまりに「奇抜」過ぎた。
なぜ、まともに服を着ない？
朝日は、短パンを被り、上着の一枚を身に付け、下にはカットソーはいていた。
雫は、ワンピースを履き、ジーンズを体に巻いていた。

「しょうがないな……」

どうせ、人間の服の着方は分からないって言うんだろう？

「そうね。」

下着ぐらいつけてるんだろうし、俺が着させてやるしかない。

俺が理性をしっかり保っとけばいいだけの話だ。
そして俺はすぐに、その考えは甘かったと痛感する。
「ほら、二人ともとりあえず服脱いで。」
二人は何の抵抗も無く服を脱いだ……だが。
「はうぁ！」
下着は無かった。
俺の目の前には、素っ裸になった朝日と、雫がいた。
やっぱり二人のボディーラインははっきりしていて……。
コラ、俺。
冷静になれ、俺。
「あの、な？　人間は、裸を見られることに抵抗があるから、
二人も、日常生活では気をつけてくれな？」
素材の硬い、ジーンズ履いてて良かった。
とりあえず二人の裸を目に焼きつけ（おい
服を着させることにした。
もちろん完成図は想像通り。なのだが、
「ノーパンにノーブラはいけないよな。」
また、プレゼント作戦しかないのか……。

「お前等、バストサイズは？」
おそらく何カップかは通じない。
「測ったことないわ。」
しょうがなくメジャーを出してきて、恐る恐るバストを測ることになってしまったのだ。
そして雫のバストを測るときだった。
「は……ふぅ……ぁあ…」
色っぽい声出すなコラ。
俺の理性は崩れかけていた。
だってさぁ、胸触ってるんだよ？
「雫ぅ、颯君が獣みたいに唸ってますぅ」
「なんて獣？」
「狼だと思いますぅ」
朝日って意外とこういうことに詳しかったりするのかな？
今の俺を的確に『狼』と比喩できるなんて。
「！！　颯は狼男だったの？」
雫はどこまでも天然だった。
「二人とも大体８５ｃｍ、Ｃぐらいだろうな。」
なぜ、Ｃって分かったかって？
元カノがそれぐらいだったからなんて言えないよな？
そして１時間後、俺の手には、ピンク系統の下着３枚と黒ｏｒ白の下着が３枚握られていた。
「これつけてから、服着ろ」

だあぁ！
もう少し待ってから服脱げよ！
「このズボンもどきは履けたんですけどぉ……。」
「このブラジャーってのは、付け方がわからないわ。」
「つけてください」
「つけてくれない？」
「はぁ……。」
ため息混じりに、朝日に近寄る。
「背中向けろ。」
「はぃ。」
「ブラ渡せ。」
「はぃ。」
朝日の背中から手を回す。
「いいか？　これはこうしてだなぁ」
後ろから、朝日に顔を近づけ、説明してやる。
「は、はいぃ……。」
心なしか、朝日がもぞもぞしている。
「トイレ？」
「は、はずかしいですぅ。颯君の顔がこんな近くに、きゃっ」
はずかしいとか言うくせに、人に裸を見せた上に、
いきなり俺の方に振り向いたのである。

危うく、キスするところだった。
「いいから、早くこい。雫が待ってるんだから。」
「はぁ～い」

なんとか、朝日は終了。
自分でも付けれるようにするためか、付けたりはずしたり練習して……。
「コラァ！　ここで練習せんでいい！」
「なんでですかぁ？」

「俺が男だからだよ！　もういい加減理性壊れそうなんだよ！
いつまでも俺に裸見せてると〈ピ――〉ぞ！」

「〈ピ――〉てなんですかぁ？」
「生殖行為するってことじゃないかしら？」
「あぁ、人間は好きですからねぇ」

「……ほら、雫。お前もこっちこい」
「わかったわ。」
「背中。」
早く終わらせないと、イカレそう。
さっきと同じように背中から手を回し、説明する。
「こうして、腕を通して。」
「は、はぁ……あぁ……」
「どうした？」
「息でムズムズして…気持ちいいわ…。」
危ないよこの人！
「お前なに〈バキューン〉んだよ！」

そうして、見てしまった雫の目は……。
完全にヤバイ目をしていた。
半開きでトローンとしている。
口も締りが無い。

「全員で俺を誘ってんじゃねぇ！」

疲れきった俺は、まだ暗くならないうちから布団に潜り込んだのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7835c/

君と共に……

2010年10月8日21時46分発行